

『三彌底部論』の研究——我に関する章——(上)

加 治 洋 一

一 序

『三彌底部論』が様な意味で看過できない論書であることは夙に指摘されている。しかしこの『三彌底部論』そのものを直接取扱った研究は少なく、我我は次の二つの研究業績を挙げることができると過ぎない。

- (1) 赤沼智善、西尾京雄両氏による国訳一切経毘曇部六に収められている「三彌底部論」

- (2) Venkataramanan: *Sāṃmityānikāya Śāstra*, *Viśvabharati Annals* vol. V, 1953

しかしいづれも優れた労作であり、以下の研究は総て右の両氏の業績に負うものである。

この論が犢子部・正量部の主張したと伝えられる特異な有我論を真正面から展開しているものであることは言を俟つ迄もない。しかし、有我説を主張したという事で

一般に同執として扱われる犢子部と正量部ではあるが、犢子部が五藏説をその有我論の要ともしているのに対し、この論では五藏説そのものに言及しない。詳細は別稿に譲らざるを得ないが、つまり、それぞれの教理体系全体の中で有我論が占める位置が異っていることは一言しておかねばならないだろう。

また殆ど南方上座部と有部系のものしか現存していないアビダルマ論書の中で、稀なそれ以外の文献の一つであり、部派仏教研究に当って等閑にできないこと、更には大乘仏教、就中、常楽我浄を主張する涅槃経成立の思想的背景を探る上で^{補注一}閑却できないこと等等が諸師によって指摘されている。

さてこの論は大略三つの部分に分けることができる。

- (1) 我についての(存在、五蘊との異同等等についての)議論。
- (2) 輪廻の主体の問題に関連して導かれる中有につ

いての議論。(3)実践道と関連させての議論である。今回我我はこの三部分の中、(1)の部分についての解説を試みようとするものである。次に論全体の科段を掲げるが、議論の流れを読み取り易くするため、それぞれ説明的な文章で示している。

* 婦敬文

I 序 論

- 1 人の往生について
- 2 業について
- 3 中有について

II 我についての他部派の見解

1 主題の提示

2 我の存在についての他部派の見解

① 我は存在しないという主張

- イ 生起するのは苦のみである
- ロ 我が存在するとは説かれていない
- ハ 自ら自分自身の肉体を見ているからである
- ニ 我も我所も把握されぬ
- ホ 我とは実体なきものとしての存在である

② 我の存在・非存在については論じるべきでない

という主張

イ 我の相を規定することはできない

ロ 我の存在に関する問題は捨置記である

ハ 我には互いに矛盾した規定を関係させることができる

ニ 我は常とも無常とも言うことができる

ホ 有無の二辺によって論じてはならないと説かれている

③ 我は存在するという主張

イ 五蘊の繫縛が次生に至ると説かれている

ロ 化生の有情有りとするのが正見である

ハ 四念住の主体である

ニ 声聞の過去世が説かれている

ホ 一人のブドガラが世に生じると説かれている

3 ブドガラと五蘊との関係についての他部派の見解

① 五蘊がブドガラであると説く主張

② ブドガラと五蘊とは別のものであるとする主張

- イ 五蘊という重荷を担うのがブドガラである
- ロ ブドガラとは取と愛とを持つものである
- ハ ブドガラは業の果報を受ける主体である
- ニ 過去世の何某は私であると説かれている

ホ プドガラの常・無常は言及されていない
プドガラの常・無常についての他部派の見解

① プドガラは常であるという主張

イ プドガラには本源がない

ロ 過去世のことを記憶している

ハ 彼岸に永住すると説かれている

ニ 不動の樂に至ることが説かれている

② プドガラは無常であるという主張

イ プドガラには本源がある

ロ 新たに生まれると説かれている

ハ 倒れるということが説かれている

ニ 没し生じるものである

ホ 生老病死するものである

5 他部派の見解の整理

Ⅲ 我についての他部派の見解に対する批判

1 主題の確認

2 我の存在についての他部派の見解に対する批判

① 我は存在しないという主張に対する批判

イ 苦の生滅を我に敷衍してはならない (Ⅱ 2 ①
イ に対する批判)

ロ 我は有為法によって施説されている (Ⅱ 2 ①

ロ に対する批判)

ハ 蘊は我ではないが無知な者はそれを我と言う、
そのことに対する教えである (Ⅱ 2 ① ハ に対す
る批判)

ニ 自在でないから我を把握することができない
(Ⅱ 2 ① ニ に対する批判)

ホ 実体がないとは我の否定ではない (Ⅱ 2 ① ホ
に対する批判)

② 我の存在・非存在については論じるべきではな
いという主張に対する批判

イ 相は規定できなくとも存在すると言い得る
(Ⅱ 2 ② イ に対する批判)

ロ 問いの立て方が適切でないから捨置記となる
(Ⅱ 2 ② ロ に対する批判)

ハ 我について明らかであるなら有為法であるか
否かを説く事ができる筈である (Ⅱ 2 ② ハ に対
する批判)

ニ 我は常・無常という在り方で存在しているの
ではない (Ⅱ 2 ② ニ に対する批判)

ホ 我について有の依止も説かれているから存在
しないのではない (Ⅱ 2 ② ホ に対する批判)

③ 我は存在するという主張に対する批判

イ 我は存在しなくとも繫縛ということに矛盾は生じない (Ⅱ 2 ③イに対する批判)

ロ 有漏の五蘊に依ってブドガラ有りと言われたのである (Ⅱ 2 ③ロに対する批判)

ハ 心念住に於て存在するのは心のみであると説かれてはいる (Ⅱ 2 ③ハに対する批判)

ニ 十二処を声聞と説かれたのである (Ⅱ 2 ③ニに対する批判)

ホ 我が存在ししないとする主張と同類である (Ⅱ 2 ③ホに対する批判)

3 ブドガラと五蘊の関係についての他部派の見解に対する批判

① 五蘊がブドガラであるとする主張に対する批判 (Ⅱ 3 ①に対する批判)

② ブドガラと五蘊とは別のものであるとする主張に対する批判

イ 別のものであっても身体全体の一部であれば矛盾する (Ⅱ 3 ②イに対する批判)

ロ 愛が断滅すれば流転しない (Ⅱ 3 ②ロに対する批判)

る批判)

ハ 有漏の五蘊に依って生死するから果報を受け (Ⅱ 3 ②ハに対する批判)

ニ 有為法を三世に分ち説かれている (Ⅱ 3 ②ニに対する批判)

ホ ブドガラと五蘊が別であるとも説かれていない (Ⅱ 3 ②ホに対する批判)

4 ブドガラの常・無常についての他部派の見解に対する批判

① ブドガラは常であるとする主張に対する批判
イ 生死にも本源がないから常であることになる (Ⅱ 4 ①イに対する批判)

ロ 過去の記憶が同一相続の人に限られているのは矛盾している (Ⅱ 4 ①ロに対する批判)

ハ 彼岸に留まるのは有余依涅槃である (Ⅱ 4 ①ハに対する批判)

ニ 不動の楽とは無余依涅槃である (Ⅱ 4 ①ニに対する批判)

② ブドガラは無常であるとする主張に対する批判

イ 有漏の五蘊の生起をブドガラと説いた (Ⅱ 4 ②イに対する批判)

ロ 業も一緒に滅尽することになる (II 4 ②ロに

対する批判)

IV プドガラの種類

- 1 名目の建立
- 2 依説のプドガラ
- 3 度説のプドガラ
- 4 滅説のプドガラ

V 輪廻するのは何か

- 1 主題の導入
- 2 他部派の見解
 - ① 五蘊の一辺が輪廻する
 - ② 五蘊ではないプドガラが輪廻する
 - ③ 輪廻するプドガラは存在しない
- 3 他部派の見解に対する批判
 - ① 五蘊の一辺が輪廻するのではない
 - ② プドガラのみが単独で輪廻するのではない

VI 中有の生起に関する問題

- 1 中有の生起についての総説
- 2 先ず生有を捨て次いで中有を受けるのではない
- 3 先ず中有を受け次いで生有を捨てるのではない
- 4 捨てるのと受けるのは同時である

VII 生死(五蘊)の本源を巡る議論

1 主題の提示

- 2 生死の本源は存在するが知ることができないのか
 - ① 存在するもので知ることができない例はない
 - ② 推量したものは存在するとは言えない
- 3 生死の本源は存在せず知ることができない
 - ① 存在しないものを知ることができない

- ② 知ることができないから存在しないのではない
- ③ 存在しないから知ることができないのではない
- ④ 生死の本源は存在せず知ることができないことの論証

イ 生死とは無窮に流転するものである

ロ 生死(五蘊)が滅尽しても涅槃する本体はある

ハ 我が本源であると生死は尽きないことになる

ニ 想起する過去の生涯は無限にある

ホ 本源の本源が存在しなければならぬことになる

ヘ 生死とは有と愛の展転である

⑤ 法が存在しなくても名は存在する

⑥ 生死とは五蘊の展転相続である

VII 中有の存在についての議論

1 中有は存在しないとする他部派の主張

- ① 主題の提示
- ② 中有に到達する道が説かれていない
- ③ 中有に生まれると授記されていない
- ④ 中有を果として受ける業が説かれていない
- ⑤ 中有という趣が説かれていない
- ⑥ 直ちに無間地獄に墮ちると説かれている
- ⑦ 中有を認めると中有と生有の間に更に中有が必要となる
- ⑧ 中有を認めてもそれには何の作用もない
- ⑨ 中有と共に同類の法が生じるにせよ異類の法が生じるにせよ誤りである
- ⑩ 中有の相が説かれていない
- ⑪ そっくり体ごと落ちて受生すると説かれている

2 中有が存在しないと主張に対する批判

- ① 批判の導入
- ② 過程は説かれなくとも存在する (VIII 1 ②) に対する批判

る批判)

- ③ 中有とは留まる処ではないから授記されない (VIII 1 ③) に対する批判)

- ④ 中有とは趣へ向うものである (VIII 1 ④) に対する批判)

- ⑤ 説かれるべきことが説かれない場合もある (VIII 1 ⑤) に対する批判)

- ⑥ 無間といわれたのは他の趣の否定であって中有の否定ではない (VIII 1 ⑥) に対する批判)

- ⑦ 中間静慮が更に中間を必要とせず定まっているのと同様である (VIII 1 ⑦) に対する批判)

- ⑧ 中有には趣へ至るといふ作用がある (VIII 1 ⑧) に対する批判)

- ⑨ 同類であり異類であることに過失はない (VIII 1 ⑨) に対する批判)

- ⑩ 論諍の材料を増やすからである (VIII 1 ⑩) に対する批判)

- ⑪ 未だ生じていない時が中有である (VIII 1 ⑪) に対する批判)

3 中有は存在するという自らの主張

- ① 此の世界と彼の世界との中間の処が説かれてい

る

- ② 意成の衆生が説かれている
 - ③ 中般涅槃する者がいる
 - ④ 身体そのものが次生に引続いていかなない以上中有の存在が必要である
 - ⑤ 天眼によって衆生が没し生じるのを見ると説かれている
 - ⑥ 撻闍婆が説かれている
 - ⑦ 中有が死有と生有とを互に連絡させる
 - ⑧ 稲から苗が生じ更に稲が生じるように生有、中有、生有と連鎖する
 - ⑨ 菩薩が降胎された時、全世界を遍く照らされた
 - ⑩ 中有は受生に際しての心の転変の依所である
- 4 中有が存在するという主張に対する他からの批判
- ① 中間の処とは六識のことである（Ⅷ 3 ①に対する批判）
 - ② 意より身体を生み出すとは禅味に執著することである（Ⅷ 3 ②に対する批判）
 - ③ 有行般涅槃する者については過失となる（Ⅷ 3 ③に対する批判）
 - ④ 肉体が連続しなくとも像が影を生じるように生

じることほできる（Ⅷ 3 ④に対する批判）

- ⑤ 天眼で見るのは微細な趣である（Ⅷ 3 ⑤に対する批判）
 - ⑥ 次の趣へ向うことを撻闍婆と説かれた（Ⅷ 3 ⑥に対する批判）
 - ⑦ 死有と生有とが互に連絡している（Ⅷ 3 ⑦に対する批判）
 - ⑧ 稲と苗の譬えは同一趣以外へ相続する者には不適切である（Ⅷ 3 ⑧に対する批判）
 - ⑨ 同じ光明を出されても菩薩と成仏との中間はない（Ⅷ 3 ⑨に対する批判）
 - ⑩ 実際に行かなくとも夢に見るように心の転変がある（Ⅷ 3 ⑩に対する批判）
- 5 中有の存在についての議論の決着——中有は存在する
- K 実践道とブドガラ
- 1 八種のブドガラ
 - 2 十三種のブドガラ
 - 3 生有について
 - ① 八種の生有
 - ② 善根との関係

③ 欲界を厭離することとの関係

④ 二根の者と生有

4 各種の生有とブドガラとの関係

* 結語

二 解 読 研 究

* 帰敬文

帰命一切智。我從此語如是。

一切智者に帰命し奉る。

我はこの帰命の語に従う者である。

「帰命一切智我從此語如是」の十一字をここに含めた。勿論、国訳のように「我従……」から序論とし、「我、此れ従り語ることとはくの如し」と読むことも可能であろうかと思われるが、この論の「如是」の使用例から判断して、右のように理解した。

I 序 論

1 人の往生について

是人臨欲死時成無記心。其以何業往生。答曰。有業記心惑業往惡道。無惑記心白業往善道。体性記心以是故

人は正に死のうとする時に無記の心を起すことがある。この人は如何なる業によって次の生存を受けるのであろうか。(第一段)

随行。以無記心起無記業。為業制故往生如是。是故行無隔。若眠若悶若無心死行制故往業道。此二段語顯相応。第三段語顯不失。

〔その最後心が〕有覆無記の心であれば〔それに応じた〕惑業によって悪趣へ往くし、それが無覆無記の心であれば白業によって善趣へ往く。即ち自性心(≡無記心)^④であっても、それが無記であるというそのことに随って往く。つまり無記の心によって無起の業を起こし、業というものの法則に従って次生へ往くのである。(第二段)

以上のことから、輪廻することに障害はない。眠ったまま死んでも、苦悶しつゝ死んでも、或は無心に死んでも、輪廻の法則に従ってそれぞれの業に
応じた趣へ往くのである。(第三段)

この第二段の記述は相応を顯わし、第三段の記述は総ゆる場合に過失がないことを顯わしたのである。

この段は、人はその最後心が如何なるものであつても必ず次生を受けることを明かす。

①の原文は往生。勿論極樂往生の義ではなく、三界の諸の趣に転生する意味である。②③の原文はそれぞれ「有業記心」「無惑記心」である。無記の業は異熟果を取らない筈であるのに何故輪廻し異熟身を受け得るのか、という疑問に対して、無記を分類し、それぞれの場合を明らかにする。従つて④の「体性記心」についても国訳の註に従い、「自性心」つまり無記の心の意味に理解した。

2 業について

彼業自作自業。自作者何義。答受義故。自業者何義。答分義。何以故。不往他故。是生。何以故。方便故。是行処。何以故。由彼故。是不滅。何以故。受故。此顯現故。此世作業不滅故。由報業受生四趣。

右に説いた業というものは、自ら造作するものであり、自らの業である。

自ら造作するというのは「その果を」自ら受けるという意味である。自らの業とは自らの分限であるという意味である。何故なら、自らの分限以外「の趣」へ往くことがないからである。又、これは生じるという意味である。何故なら、近づき到達するからである。又、趣に行くということである。何故なら、彼の業に従うからである。又、これは滅することがない。何故なら、「その業の果を時を隔てて」受けるし、それが「現象として」顯現するからである。つまり、この世で業を造ればそれが滅することはないからである。異熟業によつて四種の^②趣に受生するのである。

前節で業によって次の生存を受けると説いたので、その業について規定している。

①の原文は「方便」である。しかし手立て、手段という熟した意味で用いられているのではなく、訳出したように *upavā* の原意に近い所で用いられている。②の「四処」の意味は明確でない。次節で説かれる欲界と色界の第一から第三の計四種の処の意か。しかし四趣或は生有、本有、死有、中有の四有等も考えられ、これだけでは孰れとも確定することは難しい。

3 中有について

此の欲界で死ぬと、欲界の生有 (*upapatti-bhava*) の処から中有 (*antara-bhava*) の処へ行き、中有を受ける。

欲界処、若くは色界処の第一処や第三処のそれぞれの異生 (*prithagjana*) について説明すべきであろう。「先ず、欲界の異生は」欲界の中有から欲界の中有を受ける者と、欲界の中有から色界の中有を受ける者である。此の欲界で死ぬと中有を受生するのは以上の通りであるが、同様に「色界の」第三処「の異生」は、色界の中有から色界の中有を受ける。

以上の如く、我が死ぬと中有を受けるが、世尊や声聞の場合はどうであろうか。即ち、やはり中有から中有を受けるのである。「世尊や声聞は」凡夫ではないにも拘らず何故そうであるかと言えば、預流 (*sota-āpanna*) の聖者は七度生まれ七度死んで天の中有を受け、そこに留まって一来果 (*sāṅgī-agāminī-phala*) の証を得る。この者は天の中有から人の中有を受け、そこに留まって欲界を厭離する証を得る。そこでこの者は人の中有から色界の中有を受け、その中般涅槃地に留まって向一となる。更にそこから別の中有処に入

如是声聞過四中間有。有諸部說家已
斯陀舍。斯陀舍人中間有処至一間地
処。度人中間有如是。如是從欲天受
欲天。如是可知。

り、この処に於て般涅槃する。このように声聞は四種の中有を通過する。
幾つかの部派の者は、家家 (kūḍāṅka) の一來を説き、一來の聖者は人の
中有処から一間 (eka-vīṭṭha) の地に至り、人の中有処へ渡ると主張している。
又、同様に欲界の天から欲界の天「の中有」を受けるのも同じであると知
るべきである。

Ⅰで受生すると説いたが、その受生するというのは即ち中有を受けることである、と説明する。ここで漸く生有
を捨て中有を受ける主体へと議論が展開していくのである。中有そのものについては後に再び纏った議論がなされる
ので詳細はそこで検討したい。①の「向一」は、文脈から言っても最後から二番目、後一つを残すのみの者、即ち不
還の者という意味かと想像するが、或は何等かの修道過程の名称かも知れず、確定できる材料がないので「向一」の
儘とした。②の原文は「家已斯陀舍」であるが、「已」は「々」の誤写であると思われるので訂正した。

Ⅱ 我についての他部派の見解

1 主題の提示

有人捨五陰生有処受五陰中間有処。
如是一切我從此語今当説。云何有我。
我捨此有受彼有若為。問曰。何所疑。
答曰。見先師意互相違故生疑。

〈正量部〉プドガラ (pudgala) があって、五蘊を生有の処に捨て、五蘊を
中有の処で受ける。このことに関する総てをこの命題に基づきつつこれから
説明しよう。

〈他部派〉我が存在するとはどういうことか。又、我がこの生存を捨て、
次の生存を受けるといふのはどういうことなのか。

〈正〉何を疑問に思ふのか。

〈他〉先学諸師の意見がそれぞれ互に相違しているから、それを知るにつ
け疑問が生じるのだ。

2 我の存在についての他部派の見解

① 我は存在しないという主張

イ 生起するのは我のみである

有諸部説実無我。唯陰処是我。何以故。苦起而已故。世尊語迦栴延。唯苦生。唯苦滅。彼但見苦起而已。故知諸部見無有我如是。

幾つかの部派は次のように主張する。確かに我は存在しない。唯、五蘊十二処のみであって、それが我である。何故なら、苦が生起する時には「その生起しているという」そのことしかないからである。

世尊がカッチャーナ (Kaccayana, Skt. Katyayana) に語られている——唯苦が生じた時には生じたのみであり、唯苦が滅した時には滅したのみである。人は但、苦が生起(し消滅)するのを見るのみである、と。このことによつて、この幾つかの部派は我が存在することはないと考えるのである。

成実論卷三無我品三十四の「又經中説。若人不见苦是人则见我。若如实见苦则不復见我。若实有我见苦者、亦应见我」(大・32・259・上)という主張は、この無我論と同質のものであろう。また、論事(139)にも同様の主張が見られる。ここで引かれる経は、雑12、301(大・2・85・下)の「仏告毘陀迦旃延。世間有二種依、若有若無。(中略)苦生而生苦滅而滅。於彼不疑不惑。不由於他而自知。是名正見」と対応する。平行経の S. 12. 15 (S. ii. 17) にも対応する語句がある。又、雑10、262(大・2・66・下)、S. 22. 90 (S. iii. 135) にも同じ議論が見られるが、ここではアーナンダが仏陀に代つて教示している。

ロ 施設されていない

復次何義説言無我。答無説故。世尊

又語先尼梵志。如師所見法諦実説無

我。世尊言。如是見者是名為師。是

世尊が次のように語られている——セーニヤ (Seniya, Skt. Śrenika) 婆羅

名為多他阿伽度阿羅訶三藐三仏陀。

是我所説。彼諸部見無説故。是故無我如是。

門よ、もしも師が諦らかに法を觀察するなら、必ずや「我は存在しない」と説くであろう、と。世尊は「続けて」言われている——そのように「法を正しく」觀察する人を師と呼び、又、如来、応供、正徧智と名づける。以上が私の説く所である、と。

この幾つかの部派は、「我が存在すると」説かれていないから、それ故、我は存在しないと考えるのである。

この経は、雜5、105(大・2・32・上)に「仏告仙尼。汝莫生疑。以有惑故彼則生疑。仙尼当知。有三種師。(中略)彼第三師不見現在世真実是我。命終之後亦不見我。是則如来応等正覚説。現法愛断離欲滅尽涅槃」とあるのと対応する。この経は論事(124)にも引かれ、又、成実論でも「又先尼経説。於三師中若有不得現我後我。我説是師則名為仏。以仏不得故知無我」(大・32・259・中)と、我が存在しないという主張の教証として引用される。

ハ 自ら自分自身の身体を見ている

復次何義説無我。答自見其身故。世尊説言。無聞無知凡夫見色是我。我亦是色。色在我中。我在色中如是。

〈正〉復次に、どのような理由で我が存在しないと主張するのか。

四種四陰亦如是。若有我者不応自捨其身、見五陰是其体。譬如有人自捨其身取提婆達多身、見為其身。見其身是提婆達多。其身中有提婆達多。

〈他〉自ら自分自身の身体を見ているからだ。

提婆達多中有其身。如捨其眼根取提婆達多眼。見象牙。見為其知見。而

世尊が次のように説かれている——真の教えを聞かず、真理を知らない凡夫は、色は我である、或は我は色である、或は色は我の中に存在する、或は我は色の中に存在する、と考え、同様に四通りに受想行識の四蘊について考える、と。

仮に我が存在すると考えとしても、自ら「今ここにある」自分自身の身体を「考察の対象から」除外して、「觀念的に」五蘊が私の本体である等と考えてはならない。

非其見。是故無我如是。

そのように考えるのは、例えば、或る人が自分自身の身体を捨て去って、デーヴァダッタ (Devadatta) の身体を藉り、それを自分の身体であると考えようなものであり、又、その自分の身体はデーヴァダッタである、或は自分の身体の中にデーヴァダッタが居る、或はデーヴァダッタの中に自分の身体がある、と考えるようなものである。

又、例えば、自分の眼根を捨て去り、デーヴァダッタの眼を藉り、象牙を見て、それを自分の知見であると考えようなものである。それは自分自身の「知」見ではない。

以上によって、我は存在しないのである。

ここで引用される経は、例えば雑 21、570 (大・2・151・上) の「復問、尊者。云何為身見。答言長者。愚痴無聞凡夫見色是我。色異我。色中我。我中色。受想行識見是我。識異我。我中識。識中我。長者。是名身見」等と対応するのであるが、右のように「色是我、色異我」としており、この論の如く「色是我、我亦是色」とするものは見当らない。又、論事 (I 138) では「色はブドガラである」「色の中にブドガラはある」「色の外にブドガラはある」「ブドガラの中に色はある」の四種を立てるが、「色の外にブドガラはある」は「色異我」に相当するから、順序が入れ代っただけで、阿含と対応する。しかしこの「色是我我亦是色」は誤記や誤写の類ではなく、Ⅲ 3 ①に「若陰是我……若我是陰……」と同じ形が現れ、それぞれを明らかに異ったものとして取り挙げ論じている。即ち「AはBである」「BはAである」「AはBに存す」「BはAに存す」という寧ろ阿含より後期の整理された論理形式を取っていると考えられる。

このことは、この論が、今迄の無我の論証の仕方からも分るように、論理学の影響を大きく受けていることから裏付けられる。即ち、「宗||我は存在しない」「因||……故に」という論式に則り、喩として教証を出しているのである。この三支作法(時に五支を思わせる場合もあるが)に則った論証形式はこの論全体に渡って見られ、論の構造そ

のものの整理の仕方と相俟って、論理学の影響の強さを感じさせる。

後半に出される譬えも読みやすいものではないが、右の四種と対応するように理解した。

二 我も我所も把握されない

復次何義説言無我。答我我所不可得

故。世尊告諸比丘。若有我者即有我

所。若有所即有我。我及我所諦実

不可得。是故無我。彼諸部見我所

不可得故。是故無我如是。

れ故我は存在しない、と。

この幾つかの部派は、我も我所も把握されないから、それ故我は存在しないと考えるのである。

この経は俱舍論破戒品 (AKB. Pradhan's 1st ed. p. 472. 8, 大・29・156・下) 及び論事 (124) にも引用されている。中阿含200阿梨吒経 (大・1・765・中) 及び M. 22. Alagaddūpama-sutta (M. i. 138) に対応する一節がある。

ホ 実体なきものとしての存在である

復次何以故説無我。答不実言有故。

如富楼那語諸比丘長老。仏所説法甚

為難測。於無物中有我。仏自言。我

亦有如是。長老。我但知此語不測深

旨如是。不実言有故知。諸部見不実

義故。是故無我如是。

ういうことである」とお説きになった。長老達よ、私は但この言葉を知って

いるだけで、そこに隠された深い意趣を推察することができない、と。つまり実体のないものについて「存在する」と言っているからである。

この幾つかの部派は、この「実体なきもの」という語の意味を考察して、それ故、我は存在しないと結論するのである。

遺憾乍ら、この經典を阿含ニカーヤ中に発見することができず、従って「不実言有」「於無物中有我」の意味は文脈から想定するしかなかった。この無我説に対する批判であるⅢ 2 ①ホの「不実与無法共合無」も理解しづらい一文である。いづれにしても、筆者の非才もさることながら、漢訳それ自体の拙劣さ、補強資料の乏しさ等から訳語を決定できない部分が多い。先輩諸兄の御教示を仰ぐ次第である。

補注一

例えば高井観海氏は、その著『小乘仏教概論』一二〇頁で次のように述べておられる。「此の三彌底部論を觀るに「我」の問題を提起し、種々の方面より有我無我常無常を論究し、其の一節に左の如く云へり。「是故無人者成上諸過後過亦生若有人有我者上所說無過如仏說修多羅真当知是故実有我」これに依りてこれを觀れば、正量一派も亦有我論者なりしが如し。吾人は曩に犢子一派の有我思想を大乘的大我思想の萌芽として、これを肯定したる立場に於て正量一派の有我思想も亦無我の上に建設せんと欲する大我思想の萌芽として、これを承認せんとす。」